

現代短歌分類辭典

新裝判
7卷

津
端
亨
編纂

江苏工业学院图书馆
藏书章

現代短歌分類辞典

新装版 7 卷

通巻 1 6 5

昭和六十三年四月二十七日発行 定価一四、〇〇〇円

著者発行
兼印刷者

津 端 亨

発行所

現代短歌分類辞典刊行所

代表 津 端 亨

〒 345

埼玉県北葛飾郡杉戸町宮前一九六一五

電話 (〇四八〇) 三八一〇〇四〇番

振替 東京三一九三一一四

こがねばし〔黄金橋〕	一	二五七	こぎつね〔小狐〕	一	一六三	こくせき〔国籍〕	一六
こがねむし〔黄金虫〕	二〇	二五七	こぎつれーて〔漕ぎつれて〕	三	一六三	こくぜ〔国是〕	一
こがねやまぶき〔黄金山吹〕	一	二五七	こぎーて〔漕ぎて〕	一六	一六三	こくそ〔告訴〕	一
こがめ〔小瓶〕	二九	二五七	こぎむかう〔漕ぎむかう・漕ぎ向かう〕	一	一六三	こくそう〔穀倉〕	一四
こがも〔小鴨〕	二七	二五八	こぎゆきーし〔漕ぎゆきし〕	一	一六三	こくそう〔国葬〕	二四
こがら〔小雀〕	二七	二五八	こぎゆく〔漕ぎゆく〕	三	一六三	こくぞう〔穀象〕	二
こがらし〔木枯〕	四〇	二五八	こぎよすーる〔こぎ寄する・漕ぎ寄する〕	二	一六三	こくたい〔国体〕	二
こがらす〔小鴉〕	一〇	二五五	こぎよせーし〔こぎ寄せし・漕ぎ寄せし〕	二	一六三	こくたに〔古込谷〕	七
こがらめ〔小雀・こすずめ・こすづめ〕	五九	二五五	こぎよせーむ〔こぎ寄せむ・漕ぎ寄せむ〕	一	一六三	こくち〔告知〕	四
こがらめら〔小雀ら・小雀等〕	四	二六六	こぎれ〔小切れ〕	二	一六三	こくてつ〔国鉄〕	六
こがる〔焦る〕	八	二六六	こぎわたる〔漕ぎ渡る〕	一	一六四	こくてん〔黒点〕	六
こがるーる〔焦るる〕	六	二六六	こく〔扱く〕	二	一六四	こくてん〔黒電〕	七
こがれーて〔焦れて〕	九	二六七	こく〔殻〕	二〇	一六四	こくどん〔国道〕	二六
こがん〔孤雁〕	五	二六七	こく〔濃く〕	一六	一六四	こくど〔国土〕	二六
こがん〔孤雁〕	一	二六七	こくあん〔黒闇〕	一六	一六四	こくどう〔国道〕	二六
こがん〔孤顔〕	一	二六七	こくいっこく〔刻一刻〕	二	一六七	こくない〔国内〕	二六
こがん〔湖岸〕	三	二六七	こくう〔虚空〕	七	一六七	こくはく〔告白〕	二六
こき〔古稀〕	三	二六八	こくえ〔黒衣〕	七	一六八	こくはく〔酷薄〕	二六
こき〔濃き〕	四〇	二六八	こくえしゅうどうめ〔黒衣修道女〕	一	一六八	こくはつ〔告発〕	二六
こきおろす〔扱き下ろす〕	一	二七五	こくえん〔黒煙・こくへん〕	一七	一六八	こくばん〔黒板〕	一八
こきちらす〔扱きちらす〕	一	二七五	こくがい〔国外〕	一	一六八	こくひ〔黒皮〕	一
こきーつつ	一	二七五	こくき〔克己〕	二〇	一六八	こくひ〔国費〕	一
こきゆう〔呼吸〕	一六	二七五	こくぎかん〔国技館〕	九	一六八	こくふう〔国風〕	一四
こきゆう〔胡弓・こきう〕	八	二八〇	こくこくと〔刻々と・こくこくと〕	二〇	一六八	こくふくし〔克服し〕	一
こきゆうき〔こきふき・呼吸器〕	一	二八〇	こくこくに〔刻々に・こくこくに〕	九	一六八	こくふくしーたる〔克服したる〕	一
こきゆうす〔こきふす・呼吸す・こきうす〕	一	二八〇	こくご〔国語〕	二	一六八	こくぶんじ〔国分寺〕	一
こきんしゅう〔古今集〕	七	二八〇	こくさいかいぎ〔国際会議〕	四	一六八	こくべつしき〔告別式〕	一
こきんしゅう〔古今集〕	九	二八〇	こくさいとし〔国際都市〕	二	一六八	こくべん〔国宝〕	一七
こきあそぶ〔漕ぎ遊ぶ〕	三	二八二	こくさく〔国策〕	二	一九〇	こくほう〔国防〕	二五
こきいづーる〔漕ぎ出づる・漕ぎ出する〕	三	二八二	こくし〔酷使〕	一	一九〇	こくほうてん〔国宝展〕	二
こきいでーて〔漕ぎいでて・漕ぎ出でて〕	三	二八二	こくしじてん〔国史辞典〕	五	一九〇	こくほ〔国母〕	九
こきいでーむ〔漕ぎいでむ・漕ぎ出でむ〕	一	二八二	こくしじてん〔国史辞典〕	五	一九〇	こくほう〔国防〕	三
こきかへす〔こきかえす・漕ぎ返す〕	一	二八二	こくしよ〔酷暑〕	二	一九〇	こくほうしよく〔国防色〕	一
こきかへる〔こきかえる・漕ぎ帰る〕	一	二八二	こくしよ〔酷暑〕	三	一九〇	こくほうふく〔国防服〕	一
こきく〔小菊〕	五	二八二	こくじ〔告示〕	五	一九〇	こくほうふじんかい〔こくほうふじんくわい・国防婦人会〕	一
こきく〔榜来〕	五	二八二	こくじよう〔国情・こくじやう〕	七	一九〇	こくみん〔国民〕	四
こきくる〔榜き来る〕	一	二八二	こくじん〔黒人〕	一	一九〇	こくよう〔黒権〕	一四
こきしや〔小汽車〕	三	二八二	こくじんへい〔黒人兵〕	三	一九〇	こくりこ〔コクリコ〕	二
こきすぐる〔漕ぎ過ぐる〕	二	二八二	こくせい〔国勢〕	六	一九〇	こくりゆうこう〔こくりゆうかう・黒竜江〕	二
こきつて〔小切手〕	二	二八二	こくせい〔国政〕	六	一九〇	こくりよく〔国力〕	五
こきーつつ〔漕ぎつつ〕	三	二八二		四	一九〇		三

こくりん〔黒林〕	一	三〇三	こころせーむ〔心せむ〕	三	三〇三
こくんと〔コクンと〕	一	三〇三	ここだ〔幾許〕	二〇五	三〇三
こぐ〔漕ぐ・榜ぐ〕	七	三〇三	ここだく	一〇四	三〇三
こぐち〔小口〕	四	三〇五	ここち〔心地〕	一五四	三〇六
こぐま〔小熊〕	五	三〇五	ここちよう〔心地よう・心地酔う〕	六	三〇九
こぐる〔焦ぐる〕	一三	三〇五	ここちよき〔心地よき・心地良き〕	七〇	三〇九
こぐれ〔木暗れ〕	一	三〇五	ここちよく〔心地よく・心地良く〕	四	三〇〇
こぐわ〔こぐは・木鉤〕	三	三〇五	ここちよげなる〔心地よげなる・心地良げなる〕	二	三〇一
こけ〔虚仮〕	二	三〇五	ここちよげに〔心地よげに・心地良げに〕	四	三〇一
こけ〔苔・蘚〕	一五八	三〇五	ここちよき〔心地よき・心地良き〕	一八	三〇一
こけいど〔苔井戸〕	一	三〇六	ここちよし〔心地よし・心地良し〕	二四	三〇一
こけいし〔苔石〕	六	三〇六	ここちよーや〔心地よや・心地良や〕	五	三〇一
こけーさびし〔苔さびし・苔錆びし〕	六	三〇六	ここて〔此・是〕	八	三〇一
こけし〔小芥子〕	二六	三〇六	ここーな	四	三〇一
こけしみず〔苔清水・こけしみづ〕	二	三〇六	ここなる	二	三〇一
こけじ〔苔地〕	九	三〇六	ここに〔此是〕	二六五	三〇一
こけづきーて〔苔づきて〕	二〇	三〇六	このえ〔九重・このへ〕	八一	三〇一
こけづく〔苔づく・苔ずく〕	二	三〇六	このへーのーには〔九重の庭〕	一五	三〇一
こけでら〔こげでら・苔寺〕	四	三〇六	このえーのみや〔このへのみや・九重の宮〕	二	三〇一
こけにわ〔苔庭〕	三〇	三〇六	こののか〔九日〕	二六	三〇一
こけふ〔苔生〕	三	三〇六	このせ〔九年〕	六	三〇一
こけむしろ〔苔筵〕	一	三〇六	このたり〔九人〕	四	三〇一
こけむす〔苔むす〕	五	三〇六	このつ〔九歳〕	四	三〇一
こけむせーる〔苔むせる〕	五	三〇六	こばく〔幾許〕	一八	三〇一
こけもも〔苔桃〕	五	三〇六	こもと〔此処許〕	八	三〇一
こける〔転る〕	四	三〇六	こくら〔此処ら・此処等〕	六	三〇一
こけるい〔苔類〕	一	三〇六	こくらあたり〔此処ら辺り・此処等辺り〕	二	三〇一
こげくさく〔焦臭く〕	一	三〇六	こくらく〔幾許〕	六	三〇一
こげーつつ〔焦げつつ〕	一三	三〇六	こころ〔心・情・意〕	五五四	三〇一
こげのこる〔焦げ残る〕	一	三〇六			
こげーる〔焦げる〕	二	三〇六			
こげーる〔漕げる〕	七	三〇六			
ここ〔個々〕	一九	三〇六			
ここ〔此処〕	四七	三〇六			
ここ〔呱呱〕	一	三〇六			
ここあ〔ココア〕	九	三〇六			
ここいら〔此処ら〕	二	三〇六			
ここう〔こかう・孤高〕	二〇	三〇六			
ここかしこ〔此処彼処〕	三	三〇六			
ここく〔故国〕	三	三〇六			

赤い襷赤い日の丸怒濤の中の赤ン坊の泣く声

赤井嶽とどせる雲の深谷に相呼ぶらしき山どりのこゑ

あかき雲遠山のうへになくなりて川音にまぎるる頬白のこゑ④

赤き扉は閉されありて山の小鳥の声おびただしあやしきまでに

あかき日の光の中に転げ出て恍れたる豆が声絶えてゐる

赤き灯をあかるき声をあとにしてけがされぬ身のがれ来しかな②（多現）

代短歌大系

あかき実をながしきたり川上にみだれうつりぬとぶとりのこゑ

赤く大月出でにけり背戸山はまだしきりなる日ぐらしのこゑ

赤くなりヒステリカルな妻の声うはのそらには聞かざるものを

赤子泣く声しんと徹るなり風落ちがたの冬の空の冴え

赤子の生れたるこゑによるこべる君がここに寄りゆかむかな

赤子のこゑや大きくぞなりしとき朝づく日はも青葉に照らふ①

朱さびし扉のさされある唐招提寺の晝風ぎにけりかなかなのこゑ（多磨）

二

赫さびの岩面しぶきて落つる水河鹿のこゑはひびきを切れり⑧

灯あかし掩ひて眠らむ夜半に聞き居りぬ土に降ること啼く虫のこゑ①

暁近く友の軒も納まりて外面に澄めるこほろぎのこゑ

暁と夜とのさかひの少安に水をわたりて来る鳥のこゑ⑫

暁鳥のこゑをきかずにゑひしれぬみ寺の山に鳥なき如し⑧

あかつきに犬のこゑきこゆかたはらの友の寝顔をちかぢかと見ぬ

あかつきにいまだ早けれ時鳥ひとこゑにして鳴きやみにけり①

暁にうつらうつらとききにけり啼きうつりゆく蝸の声

あかつきに蛙のごとく聞きて居り野分すぎたるこほろぎの声

あかつきに氷ふみゆく下駄の音をみならの声の若きもきこえ来

あかつきに声のかぎりをあぐる鶏このいきほひのごとくにひ年⑫

あかつきに鳴き出づる蟬のこゑせはし朝よりすでに身は疲れをり

あかつきにみんみん蟬の競ふこゑ今日は今日する仕事をぞ思ふ

あかつきに群れ鳴く蟬のこゑ聞けば山のみ寺に父ぞ恋しき⑥

あかつきに夜はなりぬらし朝だちのまうけする声きこえけるかな②

暁の雨そそぎて暗き窓際に蛙の声をたしかめに立つ④

暁の雨のひびきののこしたる寒蟬のこゑひとつこそ鳴け⑧

あかつきのいまだ暗きに鳴きたつる百舌鳥の鋭声を快しとわが聞く②

あかつきのいまだ暗きにをさな児のふたり咳き入る声近くきこゆ⑫

あかつきの鐘よりたかくひびくなり霜こぼる夜のあしたづの声（新万葉集）

別

月原 橙一郎

長塚 節

高田 浪吉

斎藤 茂吉

北原 白秋

前田 夕暮

生方 たつゑ

名取 由子

津端 修

若浜 汐子

高田 浪吉

酒井 広治

高島 美智緒

高田 浪吉

加藤 洵綾

辻 昭

松村 英一

高田 浪吉

橋本 徳寿

森 二郎

中井 コツフ

土屋 文明

橋本 徳寿

斎藤 茂吉

吉田 正俊

土屋 文明

斎藤 茂吉

明 治 天皇

長谷川 銀作

吉植 庄亮

上田 英夫

土岐 善麿

千種 有任

あかつきの暗きにきそふ蝸のこゑははかなく起きてゐたるも

あかつきの暗き水際にひしめきて渡河序列の隊馬整すこゑ②（角川文庫）

あつかきの焔炉の低き渦巻きの煙のなかに何怒るこゑ

暁の小床にさめてわれひとり鳴くを聞きけりかなかなの声

暁の豪雨のなかのいつ声止みたるときに蟬と知りぬる

あかつきの桜島山の黒くある甲突川対岸のにはとりのこゑ⑧

あかつきの静けき空に啼きいでて一羽の雀こゑのさみしき⑦

暁の霜の戸口に飲びのいちはやく来て呼ばひたる声③

暁の霜にひびきて大みこゑ聞えしことを、世語りにせむ⑤

暁の島の山辺に靄ごもり鶯さはにうつりゐるこゑ

あかつきの蟬のひとこゑが諸声を誘ふあはれをわれは聴きける②（角川文庫）あかつきの空まだくらしにはとりの声はさやかにきこえけれども（新年御歌会）

暁の天ほのぼのと栄え来とに長鳴どりの声続ぎ起る

暁の巷におこる関の声いたみ忘れて起ちあがりけり（支那事変戦地）

暁の厨にこゑし立ちうごく今日も健かに母あらずらし③

暁のつゆけきなかにこゑとほり郭公きこゆ窓開け仰ぐ

暁の露やしじなる屋根の上声ふり立てて五位鶯ぞ鳴く①

暁のつゆけきなかにこゑとほり郭公きこゆ窓開け仰ぐ

あかつきの戸に甘える猫の声しばらく聞きて又眠るなり

あかつきのとりは八こゑもなくものをひと声をしむほととぎすかな

あかつきの父の祈るこゑひそなれば時に堪へがたりき③（現代短歌全集）

暁の床にわが父の祈るこゑひそなれば時に堪へがたりき③

暁の遠き山辺に鳴く鹿の声を聞くこそさびしかりけれ①

暁の床にわが父の祈るこゑひそなれば時に堪へがたりき

あかつきの土間にいとどのこゑ低しひと夜疲れて吾は眠りぬ

あかつきのかなかなのこゑかなしもよ妻が袂をまかぬこのごろ

暁の波のとどろく渚には鶯が降りをりこゑも鳴かなく

あかつきの鶏のこゑ山に来てわが寝し家の軒よりおこる

あかつきの野になきのぼる雲雀のこゑさわやかなれや土にひびけり

あかつきの比叡にのぼり息づくやまぢかにくゐる朝どりのこゑ⑩

あかつきの光ほのかに窓にあり子の産声は凱歌の如し①

あかつきの光さしくとはつどり神代ながらの声になくらむ（新年御歌会）

あかつきの光暗きに啼く鴉からすの声も稀になりたり⑩

あかつきのふしどに謡誦の声きけば銭金にかかはる日ごろさびしき

高田 浪吉

宮 柊二

山下 圭子

林 国一

千代 国一

高田 浪吉

窪田 空穂

四賀 光子

釈 迢空

竹尾 忠吉

吉野 秀雄

依田 秋圃

松本 武雄

村田 利明

長谷川 銀作

和田 蘭

長谷川 銀作

小暮 政次

高島 式部

堀内 通孝

明 治 天皇

堀内 通孝

竹尾 忠吉

古泉 千樞

佐藤 佐太郎

宇都野 研

吹田 吾平

斎藤 茂吉

芳 忠 復子

大原 重明

松村 英一

柴谷 武之祐

あかつきの眼ざめかなしやひえびえと鶏の声さへ澄みて秋来る
あかつきの門よりさそふ声をききて炊きたての飯の熱かりしかも①（音）
あかつきの鴉のこゑ山に来てわが寝し家の軒よりおこる
あかつきの山にかかれる白雲に声をあげゆく犀川の水
あかつきの山よりくだる鳥のこゑ、いくむれ過ぎて起きいでたりしか
⑥
あかつきの山鳩のこゑ聞くとときは心はなごむ哀れならねど⑭（音）
暁の闇をあはれと言ふ声す歩行新宿を別れ行く子か
あかつきのゆふつけ鳥の声すなりまだ夜深しとおもひものを②
暁の六時といふに晴れ渡る山よりひびく鶯のこゑ今日も⑦
あかつきはいまだ暗きにこの山にむらがりて鳴く蜩のこゑ③
暁はもの音あらずかなかなの澄みたる声いや澄みとほる
暁はやく大江のふちの露ふみてこの国人ら通るこゑすも
暁はわかれがたしと言ふ声のひたぶるなるを聞けばさびしも
あかつきや厨の人の語るこゑ聞くごとと馴れておもふ鶯
暁闇のなか這ひ寄りし幼児の愛しきまでにものをいふこゑ①
暁を鶏鳴きいでぬ尻声のかすかに震ふまだ稚き声②
あかつきよ山蛸のこゑ満てり今日の二人に仕合せあれよ③
赤土に照る日光のまぶしきをかの啼く声はまさしく鴉なり⑫
あかとときとおもふめざめにきこえてきこえてひとつの蟬の声のつづける（新万葉集）
あかとときと風さわだてる城濠の葭のしげみによしきりの声①
あかとときとたちまじりくる鳥が音の中に秀でてなくなるりのこゑ
あかとときと鳴きわたりゆく鳥のこゑ涙湧くがに小床にをりつ①
あかとときと雨の止みある声きこゆ蛇を警めゆくこゑきこゆ③
あかとときにさめて激しきひぐらしの声聞きたりき唯二夜ほど⑤（角川文庫）
あかとときに地震ゆりしかば山に来てあはれとぞおもふ山鳩のこゑ①
あかとときにミサタて給ふこゑとほり朝かげとどく祭壇の方に④
あかととき召はくだりて時はあらね我家の門に声はあがり③
あかとときのうすらあかりにかなかなの声鳴きしきり深山なす家①（現代）
あかととき風の吹きいでし松原に蟲なきてをりこゑかすれつつ
あかとときかなかなの声すみとほりひとりさめるて思ひ堪へなくに
あかととき霧ふかければ戸をたてぬ遠くきこゆるひぐらしの声①
あかととき露こもる草踏みゆくにつくる児らがこゑの清しき④

高橋城司 中島哀浪 宇都野研 柳沢正雄 柳沢正雄 齋藤茂吉 齋藤茂吉 明治天皇 今井邦子 今井邦子 齋藤茂吉 林圭子 古泉千樫 古泉千樫 積空 與謝野晶子 大場寅郎 山田百合子 山田次郎 佐野空穂 窪田空穂 熊谷武至 山口不二花 生方たつゑ 小暮政次 竹尾忠吉 近藤芳美 山口茂吉 山口茂吉 村田利明 久保田不二子 久保田不二子 中河幹子 中河幹子 小泉三 小泉三 古泉千樫 古泉千樫 松本常太郎 松本常太郎 村田利明 村田利明

あかとときのくらき森ぬちに啼きみたる山鳩のこゑ下になりたり（音）
あかとときの暗きに目醒め幼児は小床のなかに物語るこゑ③
あかとときの空をわたりてゆけるこゑ鳴かとおもふこゑはつづかず（新萬葉集）
あかとときの男女のこぞりたる網引こゑは海の幸呼ぶ⑭（音）
あかとときのひんがしの空に鴉鳴く声寒し納屋に糶摺りをれば
あかとときの光射し入る部屋の中に初蟬のこゑをききてねぶりぬ①（角川文庫）
あかとときのひかりしらじらくもりたるそらひくきよりひぐらしのこゑ
③
あかとときのまだくらきより鳴きそめて一日に五たび鳴く蟬のこゑ（小園）
あかとときの眼ざめ悲しも虚耳に亡き妻がこゑきこいくたびぞ
あかとときの目ざめの睡気たぬしみつきく前山のふくろうの声（安達太良）
あかとときの霧松たかくかりたる隣庭に蟬に似つるこゑ
あかとときの山径のぼりいきほふに朝鳥の声は下より聞ゆ②
あかとときの夢にかよひ来る蜩の声はすがしもうつつなく聴く
あかとときはいまだ暗きに目ざめある吾にひびきて啼く鳥のこゑ③
あかとときはまづ水のうへに白むらし物にさきだちて海鳥のこゑ⑨
あかとときゆ深山しぐれはつとりつこほろぎのこゑきはまりにけり（新萬葉集）
あかとときを鳴くほととぎすの声とほし腹の痛みに眠ざめてあれば①
あかとときを啼きつつ過ぐる鴉のこゑ山峽にして響をもてる④
赤に黄に木垂るリングの園ゆきて豊作に痛む主人のこゑをきく①
茜雲沈み果てたる江岸は遠声あれどももの静かなり
茜さす空に夕の月ありて雲雀なき立つこゑしづかなり
茜刺すまひるの木ぬれいきれだち一群の鳥入りて声なし④
赤旗上げ湧く喚声に涙ぐみ吾は用なき空想家なり④（角川文庫）
赤旗を押し立てて街を隊伍なし喉太き声に和して歌へる
アカハタを街頭に売りて、声からし今夜もかへる、足音たかく⑤
赤旗を振りりードする男あり歌声は構内のそこより起る①
あかはらの一つが鳴けば声きそひ鳴くあかはらに山ぞ明けゆく（安達太良）
赤松の林に満つる蟬の声い日の照る土に響きて聞ゆ④
赤松の幹に鳴きある蟬の声近づくときに鳴き止めてをり
赤松の森のうへなる雲の峰にひびきて鳴けり蟬のこゑも声④
明り来る玻璃窓の外に声聞え雀より鋭く高きを交ふ①
灯の見ゆる町は宿营地なりと喜びのあふるる声は言ひつぎ来たる

齋藤茂吉 久保田不二子 岡部文夫 齋藤茂吉 梨畑花城 宮柊二 村田利明 村田利明 齋藤茂吉 木俣修 中西悟堂 中西悟堂 村田利明 藤森朋夫 高橋城司 高橋城司 齋藤茂吉 中村憲吉 中村憲吉 岩松文弥 岩松文弥 高橋希人 高橋希人 松岡貞総 松岡貞総 金子信三郎 金子信三郎 高橋雅子 高橋雅子 小泉三 小泉三 今井邦子 今井邦子 近藤芳美 近藤芳美 和田厚 和田厚 渡辺順三 渡辺順三 磯幾造 磯幾造 中西悟堂 中西悟堂 島木赤彦 島木赤彦 丸山鶴松 丸山鶴松 島木赤彦 島木赤彦 葛原繁 葛原繁 山口幸安 山口幸安

明るかりし灯を消せばたかまりくる蛙の声に交るものあらず
阿寒湖の島の木立に蟬のこゑ聞こえつつ居るときどき中絶ゆ⑨
あかんぼの泣き声をきき眼をとどくりやのすみに黄蓮を煮る

秋浅し裏庭の木に来て鳴ける法師蟬に交る蟬のまろ声

秋あつく汗あえ居るに大空を異しき声して鴉鳴きすぐ①

秋雨のふりて煙れる背戸山にうちひびき鳴く当歳牛のこゑ④

秋風か寒かるる浪か大鳴門潮見の岡にこの澄めるこゑ④（角川文庫）

秋風に石ごとく声たつる多摩の河原にゆくこともなし②

秋風にいなく馬の声はしてたむろしげしありあけのつき

秋風にただよふ空の雲間よりもれて聞ゆるはつかりのこゑ①

秋風に肌すずしく午睡して聞きごころよきひぐらしのこゑ①

秋かぜに驢馬なく声も寂しきを夕は雨となりけるかな②（現代短歌全集）

秋風のさむしとおもふこのゆふべ籠のうづら声たてつなり①

秋風の白き道路に喚声を散らして過ぎぬ幾台の群①

秋かぜの広野になびく八千草や昼鳴く虫のこゑの幽けさ④

秋風の吹く日になりて鳴く蟬のひとつの声はつづかざりけり

秋風の吹けば身うちのいづくにか我をかなしむ声のするかな①（新万葉集）

秋風の吹き通す庭に皆あつまり部隊長が別辞声のみて聞く②

秋風やふきかはりけむ遠山のをじかの声のきこえそめたり②

空鐘の蓋なき叩く大声はやさしかりけり風邪ひくな忌め⑩

秋来しものの寂しき鐘の声風のまにまに身にひびきつ①

秋霧の深き山路を越くれば小鳥のこゑもきこえざりけり

秋草にむかひてあればゆくりなくわれ驚かす万歳のこゑ①

秋草の蔭に隠れて呼びて見む唄声きよき棉摘みをとめ

秋草の風ふくごとくさわやかに耳にのこるなつかしき声②

秋来ればこの山脈に声ありてひたに越えしむ我を大和に⑩（毎日花壇）

秋草にむかひてあればゆくりなくわれ驚かす万歳のこゑ

秋ぐさの花のまがきの虫の声おもひありとは聞えざりけり①

秋雲も白けし空に飛びかひて黒き小き燕こゑ啼く①

秋沙鴨のこゑ渡る寒夜やわがおもひ遠流のひとのごともわびしき

秋さむきひかりの注ぐ水の面に角乗りきほふ老若のこゑ①

秋寒くなりたる朝を厨べに火を焚くらしき妻の声きこゆ

秋さむし岩間の葎と河骨とささやくこゑか水のひびきか

秋雨の浅夜さみしく妹と吾と稚子なくこゑをききてこもるも①

秋雨のしくじく降ればこの朝は飛行機はゆかず鴨鳥のこゑ⑨

菅野清子 斎藤茂吉 熊谷武雄 高松豊 森山汀川 山下陸奥 吉野秀雄 河野慎吾 中邨秋香 明治天皇 與謝野禮巖 與謝野寛 落合直文 常見千香夫 中村憲吉 岡村憲吉 武山英子 藤田とみ子 明治天皇 尾山篤二郎 米倉久子 香川景敏 川浪磐根 窪田空穂 岡野無里 広野無明 川浪磐根 昭憲皇太后 初井しづ枝 木俣修 三浦武 松村英一 金子元臣 金子信三郎 吉植庄亮

秋雨のたえまの小草ひきやすし除きつつもとな母の声聞ゆ
秋さめの晴間をしみて桑をつむ畑にしげきこほろぎのこゑ
秋雨のふりて煙れる背戸山にうちひびき鳴く当歳牛のこゑ
秋しぐり舞れて月夜となる庭の砌にひびくこほろぎのこゑ
秋すでに闇けゆく声の動き葉にたもつ青さを視つつ船ゆく（新万葉集七）

秋すでに彼岸とおもふ日のいろの草にながれるて遠蟬の声⑥

秋空をあふぐをさな児いつとなく声出さずなりてわれに抱かる①

あきたけてかれゆく庭のむしのこゑきかぬ夜おほくなりけるかな①

秋たけて実になりはてし朝顔のかきねさびしきむしのこゑかな

秋立ちていまだ暑ししかすがに夕べはおこる虫のこゑ③

秋立つと青葉色さぶ桜木にみんみん蟬の声いまだ暑し⑤

秋立つと鳴くやすいと肝ひびくしが声悲し小夜くだちつつアララギ故人

一・新萬葉集八

秋だといふこゑに耳おほふ。冴えくるおれの心をおそれる④

秋ちかき月夜の空に声ほそく五位驚啼けばそよぐ木々の葉

秋近き山谿の家に帰り来つ河鹿のこゑの身に沁むるなり①

空地なる草萌え踏みてさやぐこゑわが児もをりとおもひて過ぎつ②

空地には土管を積めるものかげにトロッコ動かす子供の声す

あきらめの涙流れんとしたる時息通ひたる吾が子の声す（新萬葉集四）

あきつ洲神代ながらの叫声をあげむ広洲平ぎぬ今のうつつに⑦

秋燕しきり啼くなる声ありて夕べにむかふ光和まし①

あきつ群れて飛ぶ日となれば一時の蟬の声さへ続かざりけり①

秋づきし風と思ひて仰ぎみる空をあをと鷹のこゑすも③

秋づきし夕つかたにて風吹けばはや啼く蟬の声もきこえず③

秋づきて啼くこゑ寂しほととぎすのいづこの国へ帰るなるべし

秋づけばはやも騒立つ風先を雀散りつつ声のみじかさ

秋づけるこの山なかに雨ふりて蟋蟀のこゑ一夜きこえず⑥

秋といひわれから声に驚きて窓辺にとほき市街見やるかな

秋に入りふたたび荒れて夕茜きよけれど蟬のこゑつひになし（青あらし）

秋にしてよみがへるもの声もたず雨に濡れ行く石の心ぞ⑤

秋日中向うの山の根に行きし子どもらのこゑやがて聞え来⑥

秋の雨けむりてふれる草叢にもの哀れなるこほろぎのこゑ

秋の色いま極まる声もなき人豆のごと橋わたる見ゆ②

秋の海の藍幾色に流れつつ廊下よりきこゆ讚美歌の鼻声唱④

秋の蚊の おとろへたれど 声立てて 一つ飛びしが いつかみずけり②

下村海南

加納暁

結城哀草果

山下陸奥

太田水穂

本間桐人

太田水穂

安部忠三

昭憲皇太后

昭憲皇太后

久保田不二子

若林牧春

望月光

米田雄郎

四賀光子

金子信三郎

村田利明

松村英一

桜井礼丸

今井邦子

初井しづ枝

森二郎

久保田不二子

塚田菁紀

金田千鶴

平中歳子

斎藤茂吉

若山牧水

谷鼎

安田章生

高田浪吉

結城哀草果

北原白秋

山下陸奥

山陸奥

秋の川雁の声ほど濁りたり染屋の横を流れてくれれば（心の遠景）
秋の来てしづけき鳥のこゑかなし聞きをればなかにひたきも聞ゆ
秋の気の裂けて銃声に百舌鳥なけばもくさの実もしまるとききぬ⑦

（新万葉集二）

秋の声迫りきたれば暁ちかし星はひかりを収めたりけり⑦

秋の声耳を澄ませば遠潮の空にひびくが如きこえ来

秋の声まづいち早く耳に入るかかる性持つかなしむべかり①

秋の野に鳴く虫ありて草原にわが憩ふ時その声高き

秋の野に人目つつまぬさを鹿の鳴く声きけば恋しかりけり①

秋の野に豆曳くあとにひきのこる莠がなかのこほろぎの声

秋の野のちぐさの花の色々を声にうつして虫ぞなくなる

秋の日となりしこの頃寒蟬の鳴く声きくもいつまでならむ

秋の陽に散る噴水をめぐりては声あげて寄る孫の愛しも

秋の日の照れる稲穂田遠けども人ゆくらしも話声のする①

秋の日のひかり黄色に沁み照れる浅茅が原にこほろぎのこゑ

秋の日の昼深くして草の家に七面鳥の声ききにけり（新萬葉集六）

秋の灯はかなしきろかもわれひとり天地に慚づと泣くこゑきこゆ③

秋の日は障子に明し物洗ふ妻と子供のはなしこゑきこゆ（新萬葉集四）

秋の日やおもひきえ入る夕草に人惆悵の野は虫のこゑ⑩

秋の水に一筋なびく青藻ともあかつきほそきかなかなのこゑ④

秋の夜に霜の寒さも打忘れ高き声して澄み入れる虫⑭

秋の夜の風ある空を鳥の声遠ざかりてはまた近づきぬ（新萬葉集二）

秋の夜の木森は更けてあるべきに塙あらそふ鳥のこゑかも⑨

秋の夜のくまなき月にかりがねの鳴きてを渡る声のさやけさ①

秋の夜の狭霧こめたる神山にこゑすみわたり風のとわたる（地景）

秋の夜の月毛の駒のうへにして今年はききぬ初雁のこゑ①

秋の夜のながさしられて虫の声ねざむるたびに聞えけるかな①

秋の夜のふくるにつけてなく虫のこゑもさまざまわかれぬるかな

秋の夜の更けてきこゆるはなし声となりの人も月を見るらむ（新萬葉集四）

秋の夜の宿り少き氣配にて温泉宿の子らの他愛なきこゑ③

秋の夜は廊もさびしかなしげに禿のこゑす（尾草の花）④

秋の夜はながくなりけむねざめて待てどきこえぬにはとりの声①

秋の夜の木森は更けてあるべきに塙あらそふ鳥のこゑかも⑨

秋は来ぬかのさわぎより時たちてその結末の声なきは何⑦

あきはぎのちりのまがへにさをしかのこゑをかざりをふりたててなく

秋萩の花はまがきものとしつ牡鹿のこゑを野べにのこして

樋口一葉	岡野直七郎	中村憲吉	昭憲皇太后	吉井勇	森山汀川	佐藤清綱	黒田綱	昭憲皇太后	明治天皇	橋田東声	明治天皇	中村憲吉	大坪直子	與謝野寛	四賀光園	金子薫子	佐藤嘲花	三浦義一	古越千梅	豊島逃水	上山幸子	土田耕平	明治天皇	長塚節	林圭子	石川啄木	金子薫園	金子薫園	潮みどり	與謝野晶子
------	-------	------	-------	-----	------	------	-----	-------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-----	-----	------	------	------	------	-------

秋はただ我が墓めぐりひびかなむ君が好みし鈴蟲のこゑ①（現代短歌大系）
秋は敏感な心となる風にまじる虫の声々人間どもの耳に入るぢやらう
が④

秋はまだ浅芽が庭になく虫の声はしげくもなりけるかな①

秋早き朝を涼しく吹きわたる風のなかななるこほろぎの声（新萬葉集九）

秋はやき北の国辺の青木原郭公のこゑが起りまたやむ⑧

秋早き岨の夜みちを帰る村びとならむ話声する

秋はやき庭の木末に小鳥きて寂々とありこゑにも鳴かず

秋早く背戸に来てなく馬追のこゑよりもなほ細き稻妻（新萬葉集八）

秋はく嘔り癖のつくことを寂しみて聴く蟋蟀のこゑ②⑤

秋早やも東京こほろぎ声立ちてあはれこほろぎぬ阿佐ヶ谷五ノ一

秋はやも雪の光にまざれゆく渡鳥はかなし声のみに過ぐ⑤

秋晴れしこずゑにこもり鳴く蟬の朝々へりてこゑなほきこゆ②

秋晴れの空を思はする鶉の声たのしみてきく朝のめざめに（新萬葉集四）

秋晴の湖しづかなり水棹の音をりをりに鳴をよぶ声

秋日和しづけき昼は宿の下を火口に登る人の声すも

あき人の声かしましき市中ものどかにたつはかすみなりけり①

あき人のにぎはひあへる声すたりゆたかにくる年の市路に①

秋日和氣に澄む昼や隣田にもの言ふこゑのそらざらしくて①

秋日和しづけき昼は宿の下を火口に登る人の声すも

秋ふかき浅芽が庭の夕霜に声よりゆくきりぎりすかな①

秋ふかき路上の人は影のごとし落葉をふめどこゑなかりけり

秋ふくる潮あみどころ荒れにけり網引く蟹の声ばかりして①

秋ふけしふるさと家のしづけさをふとしも思ふひたきの声

秋祭り過ぎてしづけき山中のみ寺に透るくだかけのこゑ②

秋虫の声をかざりに鳴く聞けば自づと耳をすますなりけり

秋やはらくなりたる芝に嬰兒を抱きおろせばこゑあげて匂ふ①

秋山に響きて鳥の啼くこゑを幾年ぶりに今日聞きにけり③

秋山のふもととも見えぬ夕霧にこゑのみわたる雁のひとつら①

秋山はさびしかりけり山がらのちさのみある声ばかりして

秋ややに老けにけるかも朝鳥の鳴く声多く澄みてきこゆる①

あきらかに秋づく空の鳥のこゑ曇のなかを移りあるなり⑧

あきらかに空を過ぎつつ声ふゆる鴉のこゑは東に向ふ⑧

あきらかに日のつまりたる夕べにてはじめて蟬の声をききとむ③（現代短歌全集）

あきらけき声きく如き時あれど昭和十九年死にし君はも

小暮政次	長谷川銀作	宮柊二	宮柊二	白水吉次郎	佐佐木弘綱	明治天皇	竹尾忠吉	鈴江幸太郎	豊島晃	田谷鋭	潮みどり	正岡子規	金子薫園	明治天皇	赤星信一	荒木暢夫	昭憲皇太后	昭憲皇太后	赤星信一	下村海南	杉岡富美枝	白井大翼	若林牧春	北原白秋	吉井勇	山崎光利	北見志保子	依田秋圃	松村英一	越前翠村	明治天皇	米田雄郎	川田順
------	-------	-----	-----	-------	-------	------	------	-------	-----	-----	------	------	------	------	------	------	-------	-------	------	------	-------	------	------	------	-----	------	-------	------	------	------	------	------	-----

明らけき戸の面の日ざしぞおもはるるこもりゐて聞くひたきの声に
あきらけく吾がいふこゑにおそれなき花咲ける日をわれは思へり
あきらめし空にさやかに月澄めばわれを呼ぶ子の声ぞきこゆる①
諦めてあきらめられぬ世なるかなまた秋の月の松虫の声①
諦めと悲哀ひびかすまぼろしの声きこえつつわれは生きつぐ③角川文庫
諦めよあきらめよと母がいふこゑを血を咯きながら我はうべなふ④新万葉集二

葉集二

悪声は耳に入らずとよそほへる内閣もつひに倒るる日来ぬ⑤

悪熱や神のささやくみ告げとも魔のおらびとも人の声聞く

あくまでも善意に解しわれに集る怒声の中に面さらしをる②

あけはなつ山の御坊は松風に夏うぐひすの声もすずしく

暁方を眼がさめ床に立ちたるに仏法僧鳥のこゑがきこえて⑧

暁方に啼く梟の声ききつとほき但馬の友おもひをり②

明け方には夜はなりぬらし枕べに鳴くこゑよわるきりぎりすかな③

あけがたにわが家の上を鳴きすぎみ声のにごれるは帰る雁にか③

明方の霞める杜に一時を鳴くかなかなの声は徹りて③

明け方の硝子戸に顔を寄せてをり思ひがけなき雀の声に①

あけがたの気温下るにわが小猫なまめき声に牀に入りくる①

あけがたのこほろぎの声よ炭部屋へ炭とりにきてききほれてゐた①

あけがたの寒さ極まりしわがれて鳴く鶏の声短かりけり③

あけがたはとなりの森にかぶと虫とりにくる子らの声にめざむる⑨

あけがたを一番筏くだるらし低きより呼ぶこゑのひびかふ④新万葉集六

暁方を一声鳴きしほととぎす今朝旅立ちの眼を覚したり③

明けきらぬ春日の森にこがまして二声遠く鹿鳴きたり②

あけくれにものゝ乏しき歎くこゑをひそめて誰も彼も言ふ②

明け昏れの樺の繁みを揺りすぎて間あり甲高きむささびのこゑ③

明け昏れの草生は露のつめたからむいよよこゑすみ啼く草ひばり②

明け昏れの空の暗きに飛び交ひて鳴く燕のこゑあはれなり④追空

明けくればものものしけど八衢におらべる声は勝鬨の声①新万葉集二

あけくれをかなかなのこゑ鳴きすみて松亭する夏のわが家①現代短歌全集

あけぐれの声なき部屋に壁龕の灯のもとにあるとき静けさ⑧

明けぐれの庭に来て啼く雀ども声冴えざえと空にひびかす③

あけぐれの水より生るる鳥の声ひとつの声がただよふ如く③

明けそむる天地の闇のあひだより遠くかけの啼く声ぞする

あけちかくとみに蛙のこゑへりて森の若葉を風鳴らすなり⑪⑫

若山牧水 小森眞瑳郎 米倉久子 米倉久子 宮倉久子 大野虎治 半田良平 佐藤秀信 藤原東川 芥川徳郎 高田浪吉 中沢庭柯 樋口一葉 小宮良太郎 久保田不二子 三苫京子 鈴木光子 清水信 中沢庭柯 土岐善麿 中川薫 中沢庭柯 藤田とみ子 村田利明 松本滋代 水町京子 釈迢空 柿谷伸吉 中河幹子 宮柊二 大岡博 松本常太郎 太田水穂 金子薫園

明け近く吾は聞きゐつ目ざめたる子をあやす君の母らしき声⑦
暁ちかみかなかなのなく声ききついま一時を寝らくたぬしも③
明け近み遠なく鶏のこゑきけばあきらめかぬる恋心かも①
明けてなほおきいでやらぬ聞ちかくゆめおどろかす初かりのこゑ
あけながら秋ぎりくらきまどのとにまだなきやまぬ虫のこゑかな②
あけぬよりなくひぐらしの声すなりをぐらき谷の杉の林に
暁の溪に臭木の花は開けにたりとほく山鳩のこゑとよみゐて②

明け初めし元旦の外に走り出で大きく声上げわめく童か②

あけ放つ窓に暁がたかなかなの二こゑ来鳴く妻の声かも⑤

明けはなれし障子の外はひよどりの啼き来啼き去りこゑのみじかさ

あけぼの霞の中に人声の歛の光はしづけかりけり②

あけぼのの萌ゆる木の香にひなどりのただよふばかりこゑを鳴きあふ

明けゆくや青葉しづけきうら山の雲居のなかの鳥のこゑこゑ①

あけわたる田中の里になく鳥のこゑよりたてるあさけぶりかな④新年御歌

あけ潮の波にのる子らの百人の声海の声と和せり無心に聞けば③

あけ給ふ笑ひの声のはなやかにこの今をしも思へばきこゆる④

あけ雲雀あさの茜に目も声もしとどに濡れて鳴くにやあらむ①

揚雲雀朝から声のちりちりと五月あらしに峯暗るるなり

あけ雲雀空の光りに一筋に鳴き入るこゑの土にしみつ

揚雲雀空の中処にまぎれゆき声のみが降り来ひかりの如く

吾子いまし睡入るとすらし泣声のかすけくなりて守唄きこゆ

あこがれて聴けばきこゆる声のあり青葉さはめきくる風のなか②

あこがれをただうたひむなしきは詩人よとさげすみていふこゑもきこゆる④

吾子死ぬやいなないないといふ神のこゑきまなくくるほはしきかも

吾子は五つ大声放ち読むに似たり読本巻一さかさにはもたぬ

英虞の海入江暮れたる夕もやに声よき海士がおし送り唄③新月

あさあかり竹の葉を揺る初夏の微風のなかに君が声澄む

あさあけし御裳濯川にきほひ鳴くかじかのこゑは空にひびきぬ

朝あけてうちとよみ鳴く雉子の声われのどろかに来りけらしも

朝明けて音きこえけるかみなりの榛名の山に位置をかへつつ

朝あけて雲ばら色に匂ふときわれは声あぐ心新たに④

朝あけて遠く目に入る鋭き山をアフリカなりといふ声ぞする③

朝明けてひた怒りを狂人のこゑをききつつ疑はずけり

朝あけの空気澄みたる山こえて向ふ部落のラジオが聞ゆ④朝日短歌二

松田常憲 半田良平 築地藤子 樋口一葉 明治天皇 池袋清風 田谷省吾 都筑省吾 窪田章一郎 岡田真 小田観 野原水嶺 高田浪吉 大原重朝 鐸静枝 塚田菁紀 太田水穂 工藤静歌 太田水穂 平中歳子 若山牧水 遠山光栄 安田章生 原阿佐緒 葛谷鮎彦 佐佐木信綱 立岩茂吉 山口茂吉 古泉千樗 木村捨録 安田章生 斎藤茂吉 斎藤茂吉 中島清

あさあけの芝原も土もくろく見ゆ幼子が海こえてかへりくるなり①

朝明けの光さし入る本堂にみ名を唱ふる声こもるなり

朝あけの山の宿りの寒ければおのづから徹るほととぎすの声

朝あけを声鳴きかはし仔牛らの水浴にゆく遠き湖③

朝あけを櫓みこしする子等の声遠くにふつと消えにけるかな①④(現代)

(短歌大系)

朝明を啼きかはす鴨はしづかなる水の面に声をひびかせて啼く③(現代)

短歌大系・現代短歌全集

朝々の蚊張にひびきし茅蝸も霖雨過ぎしけふは声減りにけり③(角川文庫)

朝々に霧たちのぼる岩山にひびきて鳴くは駒鳥のこゑ③

朝々のおもき曇りになく虫のこゑをしきかむ心しづめて④

朝々のかぜの冷たさ木の梢に鵲の鋭声もきくべくなりぬ

朝々の炊事に骨折る老父をいふ時君が苦しみのこゑ⑪

朝々の蚊帳にひびきし茅蝸も霖雨過ぎしけふは声減りにけり

朝々は妻が芝生になげてやる仏飯につどふ雀子のこゑ

朝々は野茨花咲く背戸垣のほとりに妻のこゑさやけし

朝朝を土手に山羊つれてゆくわが子すこやけし山羊の声音をまねて④

朝井くむくるまの音にまぎれけり霧のなかなる初雁のこゑ

朝寝してきけばすまなし精米場にはやいそしめる兄の声すも

朝寝せし吾を起しに来るならむ妻が子供に言ひつくる声

朝いひのととのひたりと児が呼べるこゑに應ふる吾ひとりのみに③

朝いまだあけぬ向ひの山べより梟のこゑつぎておこれり①

朝寝よりめざめて聞けば隣の児書よむ声す日曜ならむ

朝餌まちて籠の金絲雀こゑたてぬ朝窓うたに思ひ倦みをれば③

朝起きの鴉のこゑを聞くときは心はしばし透きとほるほど②⑦

朝光にけぶりて掻きみし海苔舟の移りゆくころ君のこゑぞする

朝光に八つ手の上葉明るくて湯浴みする客の声ひびくなり

朝光のほのかに蚊帳に透き来るに蛙の声の間近く聞ゆ

朝かげの松の木群に鳴くこゑの沁みてしづけき今年の郭公⑥

朝光よすずしとを見れ炒る声の油蟬居ればにいに蟬居り

朝影は仰ぐにまぶし真名鶴の立ち舞ふ空ゆこゑ落ちきたる

朝霞む雑木の山の若葉しげり山鳩の声筒鳥のなく④

あさかぜに嘶く馬の青駒はいさましきかもこゑ澄みとほり(地懐)

朝風に嘶く馬のこゑきこゆ村人は山に曳きてゆくらし

朝風にいななく駒の声さむし雪の中道たれかゆくらむ①

上代 皓三

藤沢 古夷

谷 淑子

清水 恒子

生田 蝶介

大悟法 利雄

木俣 修

久保田 不二子

長谷川 銀作

富山 太刀夫

松村 英一

木俣 修

山下 陸奥

木俣 修

高安 国世

金子 元臣

大熊 長次郎

神谷 政雄

村田 利明

大場 寅郎

窪川 豊男

金子 薫園

斎藤 茂吉

鈴江 幸太郎

中山 与志夫

木下 昭徳

宮 柊二

北原 白秋

泉 甲二

高田 浪吉

久保田 不二子

橋田 東声

藤森 青二

昭憲 皇太后

朝風にさんまさんまと呼ぶ声のはるかに坂を下り来にけり(新萬葉集四)

朝風にすがしと思ふ雛鶴の鳴く声やさし池の辺にして⑤

朝風に鳴き出づる驢馬の声きけば島の山かげに疲れ来にけり①

朝風の空高々しうら島にはやくも子らが紙薦あぐるこゑ

朝顔の枯葉が下にきこゆなりなきよわりたるこほろぎの声①

朝顔は小さく咲きて明け方の透垣くぐる秋鳥のこゑ

朝顔をよびつつ通る声よりも朝の涼しさ早くすぎけり⑪

朝が来た、すずめの鳴き声楽しそう、太陽も負けずに七色を浴びせる

(児童歌集)

朝がすみたなびくみねをはるばるとこえゆく雁のこゑをしぞ思ふ①

朝方のなびく厠も秋たけてシベリやつぐみわたり啼くこゑ①

朝がたは下田の蛙すがしけれ戸やあくるただち声まきり来る⑩

朝がたは野づらにひくく鶯こめぬ四方かけめぐる諸鳥のこゑ

阿佐ヶ谷気象台音ひとつなき刻経ちて寒蟬のこゑをひとつ聴きとむ

あさがらす鳴きたつこゑも静かにて春雨くらし松のした庵②

朝聴くに女性(にょせう)の声もまびらひて現しき寺やまた明けそめつ⑪(多磨四)

浅き瀬に人らおり立ち網を打ち鮎をつかむと声々さわぐ③

浅き湯へ傾く長きすべり台しぶきがあがり親子の喚声⑤

あさ清めをはりにけらし窓ちかくなく鶯のこゑのきこゆる

あさぎなす朝山に雲の立つ見えてつゆしとどなるよしきりの声

朝きよめするかたよきて木がくれに庭めぐりするうぐひすの声

朝ざらひ向ひの山の見えざるにいかるが声とほりてきこゆ②

朝霧にほろこほること啼くこゑはこの御寺の鳩にかもなも

朝霧にみぎはも見えず大井川舟よぶ人のこゑばかりして①

朝霧の未だ霽れざる杉木立間遠く聞ゆ郭公の声

朝霧の彼方に雉の声ありて葭引は啼く前景の声⑤

朝霧の鳴きとぶひよの二つとも三つとも聞えこゑのさやけき

朝霧のはれてさやけき向う山うぐひすの声つづきてきこゆ

朝霧のはれゆくまに遠くよりつくつく法師の啼く声きこゆ①

朝雲のなかにさへづる小鳥らのこゑきき飽かぬ山の草家に①

朝雲の深くしあれや田雲雀のたまゆら鳴きてこゑなきつがぬ②

朝霧のわきあがる山の近ければ鶯の声此処まできこゆ⑤

朝霧は横に櫓にしづれつつ梢つたひゆく白頭鳥のこゑかも

朝霧らふ林の中のほととぎす声はつづけどとこころ移らず②

朝霧を鳴きとぶひよの二つとも三つとも聞えこゑのさやけき①

浅草の隅に生くる子ら腹満たず唱歌うたはず声しはがれぬ①

坂本 沙喜子

今井 邦子

原 真弓

土岐 善麿

昭憲 皇太后

太田 水穂

今井 邦子

二道 節子

明治 天皇

金子 信三郎

北原 白秋

中井 克比古

木俣 修

明治 天皇

北原 白秋

岡 松寿

植松 樹

明治 天皇

潮 みどり

小出 繁

岡 麗

北原 白秋

落合 直文

松村 芳郎

中原 綾子

伊藤 嘉夫

林 嘉夫

印田 巨始

高田 浪吉

中沢 庭柯

岡 麗

泉 甲二

隅田 葉吉

伊藤 嘉夫

筏井 嘉一

朝雲の眞珠色さす波のうへ声あげて呼ぶひとつの舟を①
 朝雲のなかにさへづる小鳥らのこゑき飽かぬ山の草家に①
 朝くれば百舌の鋭るのひびく丘小さき姿沼こえてとぶ⑧
 朝雲雀空を占めつつ鳴き張りて声の落つるにしばし間のあり①
 朝雲は雨ともならではれにけり山路一里ただ雉子の声
 朝けはや引揚げの童らがその母と隣りの井戸に何かいふ声①
 朝声に向ひ風切るぼてふりは一心太助足飛ぶごとし
 朝毎に落花生ひさぐ少年の声いさぎよし点呼とる頃
 朝ごとの霜の厳しき石に鳴く鶴の声も持たれぬるかな②⑦
 朝寒き門辺に群る子供等の中なる吾子に声かけにけり①
 朝寒のつゆけき山路鳥網張る囀のりのこゑひびきくも③
 朝寒の庭木のかげにみそささい声つつましく飛びうつりをり
 朝寒の畑の小みちの高声は蜜柑の安値かたりつつゆく
 朝さめて裏山よりぞ響きくるいちづに迫る呼子鳥の声
 朝覚めて思ふおのれの境涯にならはむといひし若き人のこゑ②
 朝さめて隣間に妻のゐることを安けくし思ふかなかなの声③（現代短歌大系・現代短歌全集）
 朝さめて物言ふ妻のこゑきけばあなはればし常の日のごと②（現代短歌大系）
 朝雨や笠の中なるこゑの主見たさに買ひしうぐひす菜かな
 朝寒の畑の小みちの高声は蜜柑の安値かたりつつゆく
 朝潮に笑ひささめく声のせて藻荇少女の舟漕ぎ過ぐる③
 朝しぐれ過ぎし玉砂利踏みゆくや心は声しひたぶるにあり
 朝しぐれ山かげの田をすく人のさむぎむ濡れて牛しかるこゑ
 朝支度してをる母に目をさまし妻ゆり起す声をひそめて
 朝じめる河原の草のここに鳴く草雲雀こゑのすみたる
 朝霜をふみてとひ来し師の門や御咳のこゑの今朝はきこえず（小詩園）
 あさ蟬のこゑのやみたるひとときをしづかなる山と吾はおもひき①⑤
 朝蟬のこゑの起らず山木むらいまだ日陰影は暑くならずも⑧
 朝空の光の中ゆき鶴舞へり遠くへはゆかず声のめでたさ
 朝空をとぶ飛行機と銃声すいぶかしみつつ緊張しをり⑦
 朝蘭けて陽あたりぬくき母の部屋はや勤行のこゑ睡げなり
 朝たけて松蟬こゑををしまざる風照となりぬ山なかの湖
 朝立ちて行く野の寺によべ聞きし声の主人の鐘を見るかな①
 朝発ちの客あるらしき門べにはジープとどろき別れ惜しむこゑ①
 朝溪の日かげうつろひやすくして声おとしゆく山鵲とほし（新萬葉集六）

上代 皓三
 高田 浪吉
 高田 浪吉
 伊藤 嘉夫
 服部 躬治
 中村 正爾
 北原 白秋
 上原 稻吉
 吉井 勇
 三井 京子
 尾山 篤二郎
 対馬 完治
 高島 友次郎
 今井 邦子
 川上 小夜子
 土田 耕平
 菊池 剣
 武山 英子
 高島 友次郎
 佐佐木 信綱
 村越 文吉
 橘 宗利
 久保田 邦広
 高鹽 背山
 金子 薫園
 斎藤 茂吉
 高田 浪吉
 泉 甲二
 今井 邦子
 荒木 暢夫
 吉植 庄亮
 武島 羽衣
 中村 正爾
 中島 花楠

浅茅生の庭のつゆはらふみわけてあつめぬ虫の声をきくかな①
 あさつく日大きく赤くのぼりきてあなかな蟬の一途なる声
 朝露のしとどおく山に聞きとめし十二のこゑはいまだ幼き③
 朝露の冷えし草むら濡れとほり微かきしきし虫のこゑしつ⑧
 朝づきて岩が根にさす日はさむし心に沁む雷鳴のこゑ①
 朝月は小秋の露にしづみけりあかつきやみのこほろぎの声①
 あさづく日大きく赤くのぼりきてあなかな蟬の一途なる声
 朝づく日おほく霧や突如として駅の利声は柿の木あたり⑨
 朝づく日さしくるなべに草むらの根に鳴く蟲も声ひそみなく
 朝づく日つゆにかがやく草村にのこりてもなく蟲のこゑかな
 朝月夜いまだ暗きに萩にほの人と見ゆれば声かけて見し
 朝勤行終りてしばし坐り居る時の間さびし閑古のこゑ①
 朝戸あくるひびきのうちにまぎれけり一声なきしやま小規
 朝戸くりてまだこほろぎの声しげき季の微妙さや夏はゆくらし⑤
 あさ戸出の身のすがしきよしきりの声くまもなき野みちを通る
 朝戸出に杉を木高み飛びたるは声は鳴かねどほととぎすかも
 朝戸出ちひと声ききし鶯をいくたび今日はひとにかたりし（新萬葉集二）
 朝戸出の庭をあるけば行々子鳴く声きこゆ馬塞垣の外に⑥
 朝戸引く庭にすもの花しろし日は照りながらこゑなき閑けさ
 朝床にきけば殖えゆく雀のこゑ土の上には霜深からむ
 朝床にこゑも立てなく目覚めたる吾は液体のごとく居りぬ①
 朝床に頬白のこゑたのしみて久しくゆかぬわが家をおもふ②
 朝床に目ざめてあれば時過ぎて飯も冷えぬと云ふ声のすも①
 朝床に眼ざめて起きず庭辺の雀の声を待つところかも
 朝床に目覚めてものを思ひ居れば愛しきかもよ雀鳴くこゑ⑨
 朝床に目ざめてあてうつつなしをちこちにおくるだけけのこゑ②
 朝床に百鳥のこゑは聞くとせで家妻われや厨にぞ立つ①（現代短歌全集）
 朝床のなかにひそひそとあらそへる声音をとめとなりたりけり
 朝床の枕の頬當て夢うつつ聴けば鶴のこゑの愛しさ②⑤
 朝床に雉子のなくこゑききとめつ昨日ゆきし山の裾のあたりか④
 あさ鳥の海わたりゆく声ぞする沖の夜雲もうごきいづらし
 朝どりの啼きゆくこゑを聞かむとす体ちぢめて寂し臥処より⑪
 朝どりの声さわやかにきこゆなり霧うすれゆく松の梢に
 朝鳥の声なく聞けば榎の葉も川原もなべて霜しろきかな
 朝鳥の声はまぢかくきこえ来る二階の部屋に一夜はあけぬ①
 朝鳥のこゑは冴えつつ夏富士の藍うすれゆき日を浴むるいろ④

明治 天皇
 和田 智恵子
 松本 常太郎
 高田 浪吉
 鹿兒島 壽藏
 木下 利玄
 和田 智恵子
 中村 憲吉
 伊藤 左千夫
 明治 天皇
 篠原 志都兒
 久保田 不二子
 池袋 清風
 今井 邦子
 潮 みどり
 花田 比露思
 今村 信夫
 島木 赤彦
 嵯峨 美乃
 神戸 節
 佐藤 佐太郎
 高田 浪吉
 森山 汀川
 秋田 青雨
 吉井 勇
 橋田 東声
 中河 幹子
 山本 友一
 吉井 勇
 長谷川 銀作
 太田 穂吉
 斎藤 茂吉
 佐野 熊三郎
 土屋 文明
 藤森 朋夫
 高橋 希人

朝鳥の声乱れ来る夏山は窓ひきあけてただちずしき
 朝鳥のこゑも夕鳥のこゑもせぬ平地の春をまた迎へむか⑥
 朝鳥の声を飛白に込めがてに桑の畑面は靄を織りしく
 朝鳥のこゑたつ森に藤の若葉もりあがりたるひとところあり④
 朝鳥の声はまぢかくきこえる来る二階の部屋に一夜はあけぬ①
 朝鳥はいまだ啼かねど霧ふかき山にはすでに人の居るこゑ
 あさなあさななく鶯のこゑすなり窓のたかむら霜はおけども
 あさなあさな軒ばの松にきてうたふ小鳥声よし名はしらねども
 朝な朝ななく鶯の声きくもしほしのあひだとなりけるかな
 朝な朝な正信偈よむ禪児ら親あらなくこゑ楽しかり③
 朝な朝な窓外通る苺売のこゑのみきこえ幾日すぎたる
 朝鳴きしあたりと思ふ寝むとして心しづかにきく虫のこゑ③
 朝鳴きしあたりと思ふ寝むとして心しづかにきく虫のこゑ③
 あさなぎのみづ海こえてをちかたのたかねの雪の色ぞてりくる①
 朝なさな裏竹藪にこもりなく鶯の声は梢ととのひつ
 朝なさな鳴くうぐひすのさやかなる声にし目覚むわが侘往は
 朝庭のまつめの声と竹の子のうましあつもの後思ふらむか
 朝庭の紫桔梗俯せる面は上げよ声立てて笑へ②
 朝にゆく宮地の土手に夜ゆけばこどもすだく虫の声かも①
 朝庭に草花の種子をあつめつつ妻子の語る声の笑ましき
 朝庭のまつめの声と竹の子のうましあつもの後思ふらむか
 朝寝してきけばすまなし精米場にはやいそしめる兄の声すも
 朝寝せし吾を起しに来るならむ妻が子供に言ひつくる声
 朝寝よりめざめて聞けば隣の児書よむ声す日曜ならむ
 朝寝よりめざめて聞けば隣の児書よむ声す日曜ならむ
 あさの雨はまだ肌につめたしとたちあつつきく鶯の声
 朝の雨寒くふるなり親離れまもなき鳥か声ひくう鳴⑤
 朝の雨をたのしめるときいきなりあるじの大きな声入り来ぬ④
 朝の池に靄立つひさし松原のうぐひすの声は啼きてとのふ④
 朝き飯夜の飯にもさびしかり耳朶をはなれぬ吾子の呼ぶ声②
 朝のかげ涼しく吹きぬ生垣をへだてて庫裡にものをいふ声
 朝の風涼しく吹きぬ生垣をへだてて庫裡にものをいふ声①
 朝の風吹きつるなべに雑木原蛙の声に満たされにけり②
 朝の雷北の空より聞こえ来るそのとき鳥の声も聞こえず
 朝の汽車に母に抱かれて乗りゆきし我初孫や泣声可愛ゆし⑦
 黎明の霧白くなづさふ下谿に百鳥のあぐる交々の声⑧
 麻の茎しげき千立の八千立の奥にをとめの唄ふ声する

北原 白秋
 鹿兒島 壽藏
 蕨 真
 竹尾 忠吉
 藤森 朋夫
 中村 憲吉
 明治 天皇
 阪 正臣
 三井 甲之
 斎藤 茂吉
 石川 まき子
 山下 陸奥
 谷 鼎
 井上 通泰
 河内 朝松
 岡野 直七郎
 伊藤 左千夫
 都筑 省吾
 清水 比庵
 長谷川 銀作
 伊藤 左千夫
 大熊 長次郎
 神谷 政雄
 窪川 豊男
 潮 みどり
 佐佐木 信綱
 岡野 直七郎
 中村 憲吉
 千代 国一
 塚田 菁紀
 塚田 菁紀
 菊池 知勇
 斎藤 茂吉
 今井 邦子
 若林 牧春
 南 正胤

朝の雲畑一面に翳おとしつめたきこゑにうぐひす啼けり④
 朝の瀬にまぎれずきけば声高に彼岸中日の姫等行くなり②
 朝の蟬のむらがり鳴ける聴くときにさきがけらしく鳴くこゑのあり①⑦
 朝の光あびつつ鳴けるこゑを今朝きけり鳥飼の店に①②
 朝の日のかがやく海に人声のあかるくゆれてよぎる舟あり④
 朝の日のつよく照りこむ家のめぐりにはまだこぼろぎのこゑは絶えざる
 朝の日のやうやく暑くなりしころすでに帰れる学童のこゑ
 朝の日は身に沁み来べし巷にはよるこびつくる声つたはれり
 朝の部屋に霧吹き入る風ひた遠き鶯鳥の声もこそすれ①
 朝のほどはそこら一面の寒雲雀ゆふかたまけて声へりにけり①
 朝の港波なき照りに陽光寒し多き人影のこゑひびき来ず①
 朝の雪小雨となりて暗き日を群れ移るらむひわのなくこゑ
 朝の湯は女ばかりの声にしてその声々に性の平衡あり
 朝の雷北の空より聞こえ来るそのとき鳥の声も聞こえず⑫
 朝はやき木立のなかに啼きかはす鶯のこゑを聞けばやさしも
 朝早き子供の声に目ざめけり菊見日なるを思ひ出でつも
 朝早く来る豆腐屋のふれ声のしばらく永しわが家のまへ⑤
 朝早く散歩に出づる友がこゑ妻とかはす外よりならし
 朝はやくすでに目ざむるをさなごのこゑを聞きつつわれ疲れ居り⑥
 朝早く鳴ききそふ蟬のこゑは時に一つの声とも澄み来
 朝はやく林のおくに聞きつけしもののひびきは山水のこゑ
 朝早く物売り歩く少年の勤勉にしてよくとほる声
 朝早み霧まだはれぬ犀川のむかひの岸に人声きこゆ
 朝はやも野はひそやかに陽のさして初百舌の声はげしくひびく
 朝はやも兵をおくるとよもして歓呼の声は風の中に聴ゆ
 朝は呼ぶらぢおの声の一ときに家並親しき夏となりけり①
 朝晴れのさぐもりくればいやしじに日暮なくも声のこちたく①
 朝日かげくもらぬ空をまちいでうれしげに鳴くあしたづの声①
 朝日かげ島の岩根にさし来ねば浮寝の鴨のひくく鳴くこゑ
 朝日影にほへる空に大君の千とせをよばふあしたづの声
 朝日影にほへる空に大君の千とせをよばふあしたづの声
 あさひ影のぼるもまたでふせやよりのどかにひびく庭鳥の声
 朝日かげのどかに匂ふ御そのふに千代をしめたるあしたづの声①
 朝日かげひばりのこゑもどかにて畑のなかみ桃さきにけり①
 朝日かげほのめきわたる山のはをこえゆくかりや旅路なるらむ①
 朝日かげ森のこのまにかがやきてあつさうながす蟬のもろ声

塚田 菁紀
 白井 大翼
 斎藤 茂吉
 金子 薫園
 松田 常憲
 高田 浪吉
 山下 陸奥
 高田 浪吉
 加納 小郭家
 吉植 庄亮
 荒木 暢夫
 松本 常太郎
 加藤 将之
 斎藤 茂吉
 斎藤 茂吉
 小坂 憲太郎
 長谷川 銀作
 松村 英一
 斎藤 茂吉
 国川 雄
 武田 祐吉
 相良 義重
 島木 赤彦
 松井 元夫
 中村 正爾
 穂積 忠
 蔵 真
 小松宮彰仁親王
 岡 麓
 杉 孫七郎
 賀陽宮妃敏子
 広幡 忠礼
 樋口 一葉
 昭憲 皇太后
 中邨 秋香

朝光にけぶりて掻きぬし海苔舟の移りゆくころ君のこゑぞする
朝光に八つ手の上葉明るくて湯浴みする客の声ひびくなり(多磨二)
朝光のほのかに蚊帳に透き来るに蛙の声の間近く聞ゆ
朝光よすずしとを見れ炒る声の油蟬居ればにいにい蟬居り(現代短歌大系)

鈴江 幸太郎
中山 与志夫
木下 利玄
北原 白秋

旭川駅の外に出て声を上ぐ知りし顔なきままにあひ逢ふ⑦

高田 浪吉

朝蜩遠く啼き立つこゑ聞けば夕べに醒めし如く寂しき

金田 千鶴

朝日子ののぼりたる後しばらくを松蟬とおもふ蟬のこゑする(小園)

斎藤 茂吉

朝日子を迎へ高鳴くにはつとり声たけし相呼び交はし

依田 秋圃

朝日さすえぐの樹の辺かわが友とわが幼子と睦び合ふ声

宮下 陸奥

朝日さすころは小鳥の大方は啼きやみて高き鶯のこゑ

山下 祥子

朝日さすこまが原にあしたづの千代の声こそしげきこゆれ(新年御歌会始)

北河宮妃房子内親王

あさ日さすみ池のきしにうちはぶき千代よぶたづのこゑののどけき(新年御歌会始)

藤沢 古実

朝日さす山上の霧にこゑかなし子をつれ歩む雷鳥のこゑ(新萬葉集七)

延寿寺 末弥

朝ひと時家のざわめき落ちつく頃啼く蟬の声は耳につく如し

伊藤 嘉夫

あさーひーのーと声高に引く祭文の神さびごゑは夜空にすみぬ⑥

谷 鼎

朝雲雀空を占めつつ啼き張りて声の落つるにしばし間のあり

樋口 一葉

朝ひばりのぼりつめたるこゑこぼす菜種ばたけの花に入る道(青あらし)

北原 白秋

あさばらけあがる雲雀の声きけばこゑも春になりけるかな

樋口 一葉

朝ぼらけ一天晴れて黍の葉に雀羽たたくそのこゑきこゆ

太田 穂

浅間こえて空のひがしよ美しき嘆きをひきてただかすむなる③

明 天

朝まだき闇のうちまで聞ゆなりいづくに鳴くか鶯のこゑ①

明 天

朝まだきさわぐ市場にほととぎすひとこゑ鳴きてすぐるなりけり①

室 健一

朝まだき生業はげむさと人のかど田のあたり牛のこゑする②

倉 勇三郎

朝まだき外にいで行けるをさな児の歌ふが聞ゆうれしき声に

窪 空穂

朝まだき時鳥鳴くこゑ聞けば孤の心いたくせつなし(青柳)

朝 磯子

朝まだき戸をあけ放ち蟬なくといふ妻のこゑききつつ眠る④

高田 浪吉

朝まだき鳥の啼く声聞えて来て山のかなたは曇り空なる(トビリスト歌集)

三 木 羅風

朝まだき林のはざま落葉みち小禽のこゑ一軀にひびく②

藤 好淳之

朝まだき隣家の女戸をあけて雪少なしといふこゑ聞こゆ

結 城 哀草果

朝まだきわが漉く紙と紙のあひにこほろぎのこゑはさまるごとし(現代短歌全集)

高山 道之

朝まだ早や出勤の声すれば宿直の室におどろき覚めつ
朝間にて郭公鳥の声多ししたかやまはらの梅の木群に⑧

岡野 直七郎
川田 順
岩上 与子
中西 悟堂

浅間山雲をぬぎ立つ朝晴にひびきて雉子の声が聳す(安達太良)

中 西 悟堂

浅水の草の根かげに床まけて背を呼び乱る牝かじかの声⑨

中 西 悟堂

朝目覚め木の葉そよがり尾長鳥翼空いろに声さけびつつ

北 原 白秋

朝鶯のなかに丸子のすがた見え観音堂の鳩のこゑする

吉 井 勇

朝やけのしづけき空の鳥の声きけど慰さまぬわが心かも①

築地 藤子

朝山にこもりてひびく鶯のこゑ風ぎふければ後のけどぼさ

橋本 武子

朝山にさやぐ群鳥のこゑ絶えて若葉匂はしき池水の光り(多磨二)

石川 澄水

朝山に僧の声音の太々と聞こゆる法堂の庭に入り来つ(貫一歌集)

相 沢 貫一

朝山に啼きかはす鳥の声ありて梅咲かせたる家のひそけさ(多磨三)

飯 島 俊子

朝山に啼く声きけば小鳥らも生ける命をよろこぶに似つ①

野 沢 柿茸

浅山にわが入りくれば蟋蟀の鳴くこゑがして心は和ぎぬ(白き山)

斎 藤 茂吉

朝山の谷になづさふ霧の中鳴き移る鳥の声のみにたつ③

若 林 圭子

朝山の深きに鳴ける鳥の声澄みてはきこゆ今朝の寒さに

林 圭子

朝山は風しげけれや夏鳥の百鳥のこゑの飛びみだれつつ⑨(新万葉集三・現代短歌大系)

北 原 白秋

朝山は松風早し吹きくだる風の下びのにはとりの声(豊旗雲)

佐佐木 信綱

朝闇にみだれ鳴く声頻々に海の鷗は明空による

積 口 一葉

朝夕にひざをはなれずむつれよる子猫のこゑの美しきかな⑤

樋口 一葉

浅宵をくくみなくこゑしづけかり尻尾とれたてのこの蛙をさな①

舟 崎 静枝

浅宵を宿のをんなのかんだかに電話をかくる声あわただし①

岡 野 直七郎

朝夕にはぐくむ稚児にしが声を聞けばゆらぐは吾老いぬらし

伊 藤 左千夫

朝夕にむらがり鳴きし蟬のこゑ稀々にして秋立つらしも

斎 藤 茂吉

朝宵をくくみなくこゑしづけかり尻尾とれたてのこの蛙をさな①

舟 崎 静枝

朝宵を宿のをんなのかんだかに電話をかくる声あわただし①

岡 野 直七郎

浅夜良み高き天井にランプ吊り酒くみをれば鶉のなくこゑ②

橋 田 東声

朝より鋭きを国の音声とも壁に住む者のこだまともきく⑦(角川文庫)

土 屋 文 明

朝より母にたてつく声をきけり萌え出づるもの庭に整ふ③

千 代 国 一

朝より飯を食はぬと言ふ声の巧みなる日本語なり怒号の中に①(角川文庫)

近 藤 芳 美

あさり売るこゑの遠のきて厨べにあさりを洗ふ音もやみたり④

谷 本 敦 行

あさるものあらじとおもふ庭にさへたえず雀のこゑぞきこゆる(新萬葉集)

根 本 敦 行

嘲けりも痛罵も今はよろこびの声ときくまで世なれ人なれ③

柳 原 白 蓮

あざやかに弧をゑがき飛びて四十ヤード歓声と共にコンバートしつ①

大 悟 法 利 雄

あざらけき魚を分けて呼ぶ声す時雨の前のなべて悲しく④
蹠に鞠つき遊ぶ少年の低声きけば賛美歌をうたふ

足音たかく、歌声たかく君らはゆく、スクラムかたく胸はつてゆく⑤
足尾より夜道して来しといふ声が午後九時すぎて寝間に聞こゆる⑤

あしかのうつろな声が園内にひとあしまれとなりて響かふ
葦枯れし川を見おろすうしろにて虧ふふみ啼くこゑのみじかし①

あしがもの声のみ寒く聞ゆなり堀江の水もこぼる霜夜に①
あしがらの御寺の猫のなき声も忘るるばかり海風ざわたる③⑥

葦切の鋭声は絶えてくれぐれの渚に寄する白き波の秀④
葦切りの鳴く声及ぶ限りには晴れやかならぬものあらぬかな①
葦切の雛のこゑすも夜すがらを荒びし梅雨のしづまる暁に

足先の冷えて目醒めし暁や高原の霜におどろく声す
足下にはたたく神の声すなりなるかふるらむ四方の国原①
足下の遙かに蟬の声きこゆケールカーにころがる身を委ね①②③

足たたず六十日かこのあした寒紅売の声かなしもよ④
あしたづのこゑもものどかに聞ゆなり雲井のにはやすみよかるらむ①
御歌会始

あしたづのすがた遠ざき声ややに聞こえずなりぬ牡丹はあかし①
あしたづのちとせをよばふこゑたかしとし立かへるあまつみ空に
あしたづの千むれ八千むれ千代よばふ声とよむなりみ空さやかに

あしたづの啼くにやあらん冴えわたる霜夜の月にこゑのきこゆる④
あしたづのなく声しげしすだちたるひなのあたりに人やよりけむ②
あしたづのなく声すみてふけにけり千代田の宮の秋のよの月①

あしたづの雛をはぐくむ声なり雲ある峯の松のこずゑに①
あしたづも勝いくさをやいはふらむ雲井はるかに声のきこゆる①
会始

あしたとく遠ひぐらしの声聞きつつ浅紫丹朱の朝顔をめづ①①
あしたより珊瑚樹を掘る人の声高からねども朗かに聞ゆ①②③
あしたよりふりくらしたるむら雨にぬれて来にけむ初雁のこゑ①

朝よりむしあつき空にきこえる銃のひびきは原の隅より①
足つぎて夜半帰くる密偵の哨門通過を訊す声鋭し②③④
脚とめて聴くや木ぬれの鳥のささなく節の人のしるしむ①

足とめてすなはち居れば山の峽ひる鶯のこゑ透るなり①
足にぶく痛みきたりていたづらに笑ひを強ふる人の声を聞く④
足のもと米とぐおとも明瞭にきこえぬしときねむりに陥ちぬ③

芦の湖もめぐる山々もくれなみに燃えて生きたるものの声なし②

中河幹子 香川政次 小暮夜詩 君島穂二 窪田空穂 宮柊二 藤森朋夫 明治天皇 印田巨鳥 佐佐木信綱 池田茂政 昭憲皇太后 明治天皇 明治天皇 樋口一葉 蔵檀堂 須川信行 佐佐木信綱 三條西季知 今井邦子 印田巨鳥 服部善治 赤根谷善治 木俣隆臣 三橋隆臣 千代国一 與謝野晶子 堀内通孝 堀内通孝 塩川三保子 半田良平 渡辺順三 宮柊二 小暮政次

芦の洲に雲のうごかぬ日和なり船首にあがる蛙子のこゑ
芦の中にひそみ啼くらむ葦切の声はうごかず夜もすがらなる
芦の間にとほくさびしきよしきりの声はしづかに聴くべかりけり①
集六

葦の間のほそき命を啼きかはす行々子の声夕べこもらふ
葦の若葉茂らふ池も江戸の名残にて淡き夕影によしきりのこゑ①
葦原にくだりし鶯の透りくるこゑはさびしき汐ひきたれば②

蘆原に口笛に似て呼び交す声聞きしのみ堤を帰る①②③④
あし原に鳴くなる鳥のこゑ多し日のゆふぐれとなりけるかも②
芦原に舟とめ居れば夕かけの水の面明りて鳩の鳴くこゑ

芦原にまこもが原に緋水鶏の声きこえつつ利根の夜はふく①
あし原の国の外まで聞ゆらむのどけき空のともづるのこゑ①
葦原の遠にくぐもり啼く鳥の声は野鴨と思ひて歩む

あし原の一人男の子が声ありときくべき声は神なりの声③
葦原の遠にくぐもり啼く鳥の声は野鴨と思ひて歩む④
葦原は土用南風に荒れ果てて朝さの鳥の声も減りぬる③

芦原をわたり吹き来る風に乗るやよしきりの声に一夜あけにけり
足冷えて寝がたき夜を生き残り一つあはれに啼き寄る蚊のこゑ
足曳きて来し信濃路の山深くわが病癒やす河鹿らのこゑ④

足曳の久度の山むろに今宵あてしむじみと聞くほととぎすの声①
あしひきの山といふ山にひびくなり万代よばふくに民のこゑ①
あしひきの山田の庵の暁にをりあはれなるさを鹿の声①

あしひきの山ほととぎす山にしてきけどもとほしいまのひとこゑ①
あしひきの山の端高く澄む月に通ふもさびし松風のこゑ①
あしひきの山のやま彦きみが代はなれけりなよろづよのこゑ①

あしひきの山ほととぎす一声はあまたきよりめづらしき哉①
足引の山ほととぎす一声はあまたきよりめづらしき哉②
足曳の山もさくべき声すなり月のかつらもいまかちるらむ②

あしひきの山上の山の坂みちにいくたびか聞きしひよどりの声③
足曳の久度の山むろに今宵あてしむじみと聞くほととぎすの声①
あし引の山にこたふる山彦のをたけびのこゑに木々の葉さやぐ①

あしひきの山ふところの谷なれば子供の子の四方にひびけり⑤
あしひきの山時鳥ふた声とならぬ心たかくもあるかな②
あしひきの山こがらしの行く寒さ鴉のこゑはいよよ遠しも②③④⑤

集 齋藤茂吉 明治天皇 尾山篤二郎 太田水穂 原真弓 相馬御風 八田知紀 東久世通禧 井上通孝 太田水穂 明治天皇 昭憲皇太后 明治天皇 園基祥 原真弓 奥貫信盈 金田千鶴 加藤将之 三木修 安江不空 三木修 明治天皇 紫泉千樨 古泉千樨 橋田東声 近藤芳美 隅田葉吉 金子信三郎 加納小郭家 西村醉香 永田俊夫 栗原俊夫

あしびきの山峡深く入りくれば瀬の音にまじる鶯の声①
あしびきの山ふところに入り来ればまひる鴉の啼く声きこゆアララギ七
足引の山奥ふかく入りぬとも玉の御声をやはか忘れめ⑨
足引の山田のたり穂こく時になりけらしもうたふ声する
足曳の山のひぐらし山へだて遠鳴く声のいやさやかなる
足曳の山松が梢にくくみ鳴く鳩の声きかむ山のはざまに①
芦むらにあそぶむら鳥新墾田の大田による声とよむなり⑤
蘆むらは枯いろ見えて杉の秀の四十雀のこゑ地鳴きに近し③
葦むらを立つ鳥のおと川上の水のおもてに声つづき去る②
蘆群の素枯れ伏したるあたりまで吾が児がこゑするゆふべにかへる①
足もとに鶯のこゑきこえしが水のひびきとなりけるかな②
足もとに声はきこえてのぼり来る人にはあはぬ七曲りかな①
足下にはたたく神の声すなりなみかふるらむ四方の国原
足もとの砂にもふかき潮の音のこもりてきこえ歩むに惜しき①
足もとをいましめあへる声きこゆ暗き小路曲る女子消火隊④
足疾みの老いたる犬をのしれる老いし男の声きこえくる③
足弱の妻をいたはる友のこゑあとにききつつ麦の道まがる②（地境以後）
芦原は土用南風みなみかぜに荒れ果てて朝夕の鳥の声も減りたる
葦を吹く風は涼しき夕風に声に聞ゆる清なるもの②
足尾より夜道して来しといふ声が午後九時すぎて寝間に聞こゆる⑤
紫陽花の花むら深く、声ききて、我はるにけり。青海のなか⑦
紫陽花の花、咲きしばむ背戸畑、声かけず行く、知りびとの家⑫
明日子らに持たす弁当の糧絶えしこのさ夜更けの青葉木菟のこゑ④
明日立たむ支度ととのへある兵ら声なきごとく静かなりけり（支那事変終
後

山下 秀之助
宮田 秀子
吉井 勇
八田 知紀
川田 順
原真弓
吉植 亮
松本 常太郎
竹尾 忠吉
村田 利明
桂子 定治郎
金子 元臣
服部 躬治
潮部 みどり
木俣 美恵子
真鍋 修
橋田 東声
木俣 修
斎藤 喜博
半田 良平
積田 空
積田 空
吉野 秀雄
山本 竜
吉植 亮
穂積 忠
穂積 忠
清水 信
片岡 恒信
井上 通泰
谷上 鼎
斎藤 茂吉
岡藤 麓
伊藤 嘉夫
吉植 亮

汗あえて子は眠るなりうつつと地虫啼き満つこゑのはろけさ③（角川文庫）
汗たらし駈けめぐる時耳元にわれをねぎらふ妹が声すも③（角川文庫）
汗ばみて目覚めし朝背戸敷に山鳩の声聞えゐるかも①
畦草の穂尖明るむ夕月夜蛙鳴くこゑばかりとなりぬ
畔にたち囀る雲雀のこゑちらす風は昨日ほどの寒さともなはず①
畦道の右にひだりに声みちてたのしきぞわが蛙子たちよ①
蛙を吹く夜風冷たくどこやらに早き蛙のくくみ鳴く声（多磨四）
遊び児の遊びかまけてゐる時のひとり言いふ声音やさしく④
遊びほける児らの声するそここの白壁にあるなしの余光よ②
遊ぶ児の遊びかまけてゐる時のひとり言いふ声音やさしく④
あたたかき風吹くといふ声に仕事は置かむ今日励みたり②（角川文庫）
あたたかき岩壁に鱗の腹を割く処女らの若き声に近づく④
あたたかき人の心の脈にかよひわれは思はず声をたてにけり④
暖かき道のつづける榛山一めんにある禽のこゑかも①
暖き榛林に道入りて頭越しに飛びかふ小鳥らのこゑ①
あたたかく朝寝しをればわが友と妻とがいたくきほひをる声④
暖かに暮れゆきたれば子供らの遊びの声は遅くまで聞ゆ
頭おさへ悶え泣する仏あれば大声あげて泣く仏あり③
頭痛くて泣きし少女の日と同じ昼のめざめに聞く百舌のこゑ（村野四郎）
頭おさへ悶え泣する仏あれば大声あげて泣く仏あり③
新しいきみよのはじめのかみぢやま杉吹くかぜもよろづよの声①
新しいき人声をたて道路工事われのすまひに地下よりて来つ③
新しい鯉の刺身だ。昼飯だ。おやあゝ鶯の声はどこだらう。③
新しいアジアのこゑの高きひろく世界にひびくその中にありて②②
あたらしき生命の潮たかまると波一斉に声あげにけり⑥
新しい萱屋根に秋の日はてりて蟬鳴くこゑのしづかになりぬ③
新しいカナダ国旗のデザインをいふ声はずむ友はカナダの国籍もちて⑦
新しい仮名遣ひも時にむつかしく声あげて二階の子供に質す⑤
新しい木の香こもらふ家に覚めつつ柱時計の声ひびく音①
新しい国興りゐる奉天たり語りくるこゑ夜毎にきこゆ②
あたらしき衣なきものに古き脱ぎ棄てよとふさわがしきこゑ（南あらし）
新しい声の初めとはつ音売り初音の笛を吹きつつぞ来し⑤
新しいき声も日を経てきこえ来る山の中には旧きに同じ

宮野 秀雄
吉野 喜博
斎藤 研
宇都野 暢夫
荒木 みどり
潮谷 一郎
塩谷 揚一郎
清水 信
谷水 信
谷水 信
谷水 信
宮安 柊二
高安 柊二
生田 蝶介
吉植 亮
吉植 亮
山下 陸奥
和田 厚
川田 順
醍醐 志万子
川田 順
久我 通久
初井 しづ枝
矢代 東村
土岐 善麿
尾上 柴舟
結城 哀草果
四賀 光子
吉野 秀雄
真鍋 美恵子
竹尾 忠吉
谷山 喜志子
若山 喜志子
土屋 文明